

兄よりすぐれた妹など この世に存在してはいけない

山口昇一

挿絵／天海雪乃



立ち読み版

CHARACTER



さくら 佐倉なぎさ

何をやっても駄目な美奈都の双子の兄貴。私立認印学園の二年生。趣味は盗撮で、妹の美奈都からは目の敵にされている。彼女の親友・沙希に惚れている。



まつがおかさき 松ヶ丘沙希

清楚な香り漂う認印学園の学園アイドル。黒髪の美人だが気弱で泣き虫。美奈都とは親友…以上の関係？



さくらみねと 佐倉美奈都

成績優秀、スポーツ万能、容姿端麗の認印学園のアイドル。なぎさの双子の妹。ダメ人間の兄へ事あるごとに暴力を振るう性格だが、人気者。

たかお
高輪しほ

日米ハーフの陽気な留学生。ファミレス『インナミラーズ』でウエイトレスのアルバイトをしている。USサイズの巨乳が自慢。



こひなた まなみ
小日向愛美

成績優秀な眼鏡美少女。テストではいつも美奈都と一位、二位を争っている。性格は控えめでおとなしい。



しば ひめ いく
芝姫郁子

生意気盛りのツインテールの女子ちゅーがくせー。性的好奇心旺盛。能天気、というよりバカ。成績はいつもビリから二番目。



とこ は きょう こ
常葉響子

大日本能力開発公社の
女社長。陰のある美女。
なごさに興味を抱いてお
り、彼を能力開発カリ
キュラムに誘う。



はく れい
白麗

常葉響子のそばにいる
謎の中国人秘書兼ボ
ディガード。気功や格闘
術が得意らしい。寡黙で
いつもすましている。

紙に書いてある通りに指示されたテーブルにつくと、すぐにやたらと胸を強調するカチの制服を身につけたウェイトレスが現れた。一時期なぎさは自分がこの制服にはまっていたことを思い出して、胸を高鳴らせた。

「メイアイヘルプユー。イラッシャイマセ。こちらがメニューになっておりマス」

変な日本語だなど思っただけでそのウェイトレスをよく見ると、目が青かった。うわあああ、外人だ外人だ金髪だどうしよう、と思っただけでなぎさは緊張した。はちきれんばかりの胸を、オレンジのエプロンで持ち上げるようにしている。短いスカートから、長くて形のいい足が伸びて、白いヒールに吸いこまれていた。流れるような金髪の髪がまぶしい。

「サササ、サーンクス」

妙にしゃちこばった英語で返事をして、なぎさはメニューを受け取った。ちらりと胸につけられた名札が目に入る。「高輪^{たか}レミ^わ」と書いてある。苗字が日本語ということは、ハーフなのかもしれない。

ええと、一番奥の席に座って、それからどうすればいいんだろう。なぎさはレジユメのページをめくった。

『明日のためのその一。テーブルについて、ウェイトレスがきたら、ズボンを下ろしてペニスを見せなさい』

「え？」

もう一度読みなおした。

『明日のためのその一。テーブルについて、ウェイトレスがきたら、ズボンを下ろしてペニスを見せなさい』

……間違いない。ウェイトレスにちんぼを見せろと書いてある。マ、マジかよ。というか大丈夫なのかほんと。なぎさは顔を上げてウェイトレスの顔を見つめた。天使のような笑顔で彼女がなぎさに注文を促す。

「……ソノ、ご注文をお願いします」

……どうしよう。

そのウェイトレス、かなり年上に見えたけど、よく見ると年の頃はなぎさとそんなに変わらないかもしれない。ガイジンはふけて見えるからな、そんなとりとめのないことを口の中でぶつぶつと呟いた。もじもじしているなぎさを見て、レミというウェイトレスが不安そうな表情になった。

「アノ……気分でも悪いのですか？」

「ち、違います」

「それでスカ……、今日はブルーベリータルトがサービス品になっておりマース」

一瞬曇った顔のあと、ウエイトレスのレミは華やかに笑ってみせた。マースと妙に間延びした日本語と、白いシャツの中に林檎を二つぶちこんだようなUSサイズの胸を見ていたら、むくむくとなぎさのモノがズボンの中で膨らんだ。

こんなの見せて大丈夫なのか？

まずいだろう。まずいに決まっている。でも指示は指示だ。言われた通りにするって、自分は決めたのだ。なぎさは深呼吸すると、制服のズボンのジッパを下げた。

ジーッ。

「……あの、お客サマ？」

レミが怪訝そうな顔になった。なぎさは無言で、ズボンのチャックから、馬鹿でかくなつたペニスをでろーりと引っぱり出した。

「ちゅ、注文は、これなのですが」

「ひ……」

レミの青い瞳が大きく見開かれた。ですが、じゃねえよ。なぎさは心の中で自分に突っこんだ。でもサイは投げられている。なぎさは思いきり顔に気合を入れると、ペニスを指差し、威嚇するようにうなって言った。

「とにかく、ちゅ、注文はこれなんだよ。ももも文句あんのかコラ」

レミは体を震わせて、なぎさのペニスを凝視した。持っていたトレイをぎゅつと胸に押しつける。

「ひっ……、おおお、お客サマ？」

「ちゅ、ちゅーもんはな、これ、だ」

なぎさはゆつくりと、そう繰り返した。レミは腰が抜けたように、へなへなとその場にしゃがんでしまった。

うわ、やってしまった。なぎさは思った。こんなところでいきなり自分のちんぼを見せるなんて。ワイセツ物陳列罪だ。俺は逮捕だ。捕まる。そこで、輝かしい青春時代を鑑別所で暮らすんだ。保護官がつくんだ。ヒューマンスクランブルだ。

……俺は破滅だ。やっぱり死のう。

なぎさがそう考えて、立ちあがろうとすると、レミがなぎさの膝に手を置いた。何故か頬が紅潮している。そして夢見るような顔つきになって、テーブルの下にもぐりこんできた。

「カシコマリマシタ……」

「うわ」

「……お客サマの……大きいデスウ……」

「う、うわ、なんだこいつ？」

レミはうっとりした表情で、なぎさのペニスを握ると、それに愛しそうに頬ずりした。なぎさのペニスはレミの顔ぐらゐの長さがあつた。レミは両手で丁寧になぎさのモノをささえると、たて気味の舌で玉のところからカリの先までゆつくりと舐めあげた。

「ひやん……、震えてマス……、お客サマのペニス、震えてマス……」

生まれて初めてのフェラに、なぎさの頭に電流が走つた。

「んぐ……、すご……」

レミは膨らんだなぎさのペニスを口いっぱい含むと、目をつむつて上下に顔を動かした。

「な、なんなんだいったい。アリなのかこれ」

一番奥のテールなので、他のテールからはこちらが死角になつて、あまりよく見えないようだ。後ろのテールでは家族連れが楽しげに夕食をとっている。彼らにはこちらのテールで、そんな淫靡な光景が繰り広げられているとは想像すらできないだろう。

レミがなぎさのモノを舐めあげながら、なにやら語り始めた。

「ワタクシ……、アメリカで生まれマシタ……、日本人の母、いつつも言つてマシタ……、アメリカ人確かに大きい……、でも日本人固い……、だからワタクシ固くて大きいのに憧



れてマシタ……、ミシマのブンガク、憧れてマシタ……」

レミはそんなことをぶつぶつ言いながら、夢中でなぎさのペニスにむしゃぶりついた。ミシマはかんけないだろ。そう言いそうになつたけど、波打つ快感がなぎさの意識を吹き飛ばす。思わずレミの頭を両手でつかんでなぎさはため息を漏らした。レミの見事な金髪の髪が、なぎさの指に絡まった。

「ハイスクールを出たアト、すぐ日本にきて、そんなペニス探しまシタ……、でも、皆固いケド、サイズスモール。マックでゆうSサイズね。ミーつてば非常にがっかりしてマシタ……、でも今日は神に感謝……、オウ、ゴッド」

「ゴッドつて。こ、こんなところで……、ほ、他の人に見られちゃうよ」

「コレ固くて、大きいデス……、レミのおま〇こに入ったら、レミきつと死んじやいマス……、はあ、あむあむ」

レミはなぎさのモノを含むと、上下に顔を動かし始めた。レミの唾液となぎさのペニスが奏でる、じゅぽつじゅぽつという淫靡なハーモニイがテーブルの下に流れる。たまらずなぎさはレミの髪をくしゃくしゃに握り締めた。

「ん、ん、ん、んあ、すごいでふ……、レミのお口、いっぱいふう……」
「あ、んあ……」

レミはなぎさのペニスを左手でささえて、唾液で満たした口の中で舌をへビのように何度も絡みつかせては、せつなげにため息をついた。

「ん、大きいデス……、レミの口の中で大きくなってマス……」

「ん、んあ」

絡みつく舌がたまらない。じゅぽっじゅぽっ派手に音をたてて、レミは何度も首をタテに振った。なぎさの頭の中がだんだん白くなっていく。

「お客サマ、ワタクシの口の中に、ふが……、おね、がい、シマス……」

「ご、ごめんなさい、俺、でちゃう……、あ！」

なぎさはレミの頭を抱えると、その口腔内に思いきり発射した。

「ん、んん、ん……」

どびゅどびゅどびゅ……。

レミは目をつむると、んぐ、んぐと口いっぱいに含んだ青臭い白濁した液を飲み干した。

「で、出ちゃった……」

「んぐ……青くさくって、おお、おいしいですウ……」

レミの口から、唾液か精液かわからないものが、一筋糸になってなぎさのペニスとつながっている。それを器用に舌で舐めとると、レミはうつとりとした表情になり、上目遣い

になぎさを見つめた。

「大変おかしゅうございマシタ……」

三つ指をついて、テーブルの下で頭を下げる。

「ワタクシ、ユーのようなカタナを持ったサムライ、ずっと探してましたネ……、なんなりとご注文をお願いしマス……、今日よりワタクシはアナタの奴隷でございマス……」

「ご、ご注文と言われても。コーヒー飲みにきたわけじゃないし。それに奴隷と言われても」

「そう、おっしゃらないでくださいませ……。ワタクシはご主人サマの言いつけ通りに動くメス犬になったのデスから……」

そんなことを言われてなぎさは戸惑った。いきなりご主人様や、メス犬だの言われてもこつちが困ってしまう。というか自分は英語の教師がいると聞いてここに来たのだ。

困ってしまったて、なぎさはレジユメのページをめくろうとした。自分はどうすればいいんだらう。

レミはなぎさが持ったレジユメに気づいて、目を丸くした。

「アレ？ ご主人サマ、それをちよつとワタクシに見せてくださいませ」

「あ、おい、それは……」

レミはなぎさの手からそのレジユメをひったくると、それをまじまじと見つめた。レミの顔がぱあつと華やいだ。

「ああ、なんとという運命の導き！ ご主人さまはノウリヨクカイハツコウシャからこられた生徒さまだったのですネ！」

「ええ？ じゃああんたが……」

レミは立ちあがると、恭しくなぎさに向かって一礼した。オレンジのエプロンに包まれた胸がぶるんと揺れる。

唇の周りになぎさの分泌液を光らせながらレミが微笑を浮かべた。

「それでゴザイマス。ワタクシめがご主人さまの英語教育を担当する、高輪レミです。以後お見知りオキを。ボスのミス響子からハナシは聞いておりマス」

こ、こんな英語教師がいるのか。能力開発公社とはいったいどんなところなんだ。

「ああ、ご心配ナク。こここのウエイトレスはアルバイトです。本業は、ノウリヨクカイハツの講師デス。ではさっそく授業を始めたいと思ひマスガ、ソノ前にもう一度……」

レミはそこで言葉を切ると、ゆつくりとしゃがんでなぎさのペニスを愛しそうに口に含んだ。

「もう一度……、ご主人さまのエキスを飲ませてクダサイ……」

「どこ蹴ってんだよ。へたくそ！」

キーパーの少年が、手を腰に置いて文句をつけた。蹴った少年は頭をかいて謝った。

「ごめん。変なとこいっちゃった。下のほう蹴っちゃった」

「どうでもいいけど、自分で拾いに行けよな」

シューターの少年は頷くと、茂みに向かって走りだした。藪をかきわけて、茂みに入る。もう、薄暗くてどこにボールがあるのかわからない。

「まいったな……どこだろ？」

きよろきよろと見まわすと、木の陰に女の人がしゃがんでなにかしている。なんだろうと思つて覗いてみた。愛美だった。

「あの、ボールが飛んできませんでした？」

少年は近づいて、愛美に尋ねてみた。返事のかわりに、荒い息遣いが聞こえてくる。

「はあ、はあん……、んはあ……、いやあん……、見ないで……、来ないでえ……」
「こないで？　ん？　お姉ちゃん、なにしてるの……？」

少年は息を呑んだ。愛美はしゃがんで、スカートをたくしあげていた。下着をつけていないらしく、股間が丸見えになっていた。薄い陰毛の中の生まれて初めて見る女性器が、目に焼きつくようだ。おしっこかな？　と思つただけど違うようだった。愛美は手を股間に

さしこんで、しきりに自分のそこを指でこすりあげている。くちゆくちゆくちゆと、ジャムかなにかの瓶をスプーンでかきまわすような音が聞こえてくる。

「お願い……、こっちこないで……、わたしを、見ないで……、ぐずん……」

「ひっ……、な、なにしてるの……?」

少年は怖くてそこに立ちすくんだ。木の陰から男の人が現れた。なぎさだった。手に革のベルトを持っている。

「ああ、君、びっくりさせてごめんね。このお姉ちゃんは悪いことをしたので、お兄ちゃんがお仕置きをしているところなんだ」

なぎさはそう言うなり、持っていたベルトで愛美を叩いた。愛美を叩く乾いたベルトの音が公園に響く。

「お、お仕置きなの?」

「そうだよ。せっかくだからよく見ていくといいよ。このお姉ちゃんはしかも変態だから、人に見られると喜ぶんだ。これじゃあお仕置きにならないんだけどね」

なぎさはそう言うと、あははと笑った。

「へ、変態?」

「ちが、違います……、愛美、もう恥ずかしくて死にそうです……、お願いだから、許し

て、くだ、ください……」

愛美はぼろぼろと両目から涙をこぼした。それでも股間にさしこんだ手を止めようとはしない。

「黙れメス犬。調教の最中に人間さまの言葉使いやがって！」

なぎさは愛美を蹴り飛ばした。愛美は前のめりに転んで、プリーツのついたスカートをはだけさせ、真っ白な尻をあらわにする。少年は息を呑んだ。突き出されたその尻に、なにかが刺さって、旗のポールのように立っていた。

「いぎあ！ ゆ、許して……、お願いです……、もう、許して……」

「うわ、お尻にバナナが刺さってる……」

「ねえ、君もすごいと思うよね？ こんな公園でさ、お尻の穴にバナナ突っこんで、こんなふうにオナニーして、しかも人に見られてこのお姉ちゃん喜んでるんだよ？ 変態だよ
ね」

「へ、変態じゃありません……。勘弁して……。もういやだよ……」

「お姉ちゃん、嫌がってない？」

少年が不安そうに尋ねる。なぎさは手を愛美の股間に突っこんだ。

「なんだと？ 誰がいやだって？」

なぎさは指を愛美の切れ目に沿ってすくいあげた。ぴちゃぴちゃと音をたてて愛美の分泌液がなぎさの指に絡みつく。なぎさはひとしきり愛美の股間をいじくると、手を離れた。親指と人差し指の間に、愛美の分泌液が糸を引いて垂れ下がった。

「誰がいやだつて？ あ？ 愛美さん？ 愛美さあん？」

「いや……、ひあ……、いや……、いやですう……」

「ほんとに愛美はどうしようもない変態さまだね。俺のほうがあきれるよ。万引きしてたのだって、いつかこんなふうに叱られたかったからじゃないのか？ ずっと真面目にやってきて、とにかくストレスたまりっぱなしだったんじゃないのか？」

再びなぎさは愛美の股間に手をさしこんだ。今度はクリトリスのあたりを執拗にいじくりまわしてやる。レミに教わった性技が役に立った。なぎさの指は巧みに愛美の先端を探りだし、厚い包皮に包まれたそこを指先でつんつんとつつきまわした。愛美が泣きながら腰を振り始める。尻に刺さったバナナが揺れる。かけた眼鏡が鼻の先までずり落ちた。

「あひあ！ んあ！ もう駄目！ 駄目だよ……、あ、ああ！」

クリトリスとアヌスを同時に責められるのがよほどいいのか、愛美は口から涎を垂らし、別人のように上がり始めた。下の口も際限なく涎をあふれさせている。

「ああん！ おかしくなつちゃう！ こんな格好で！ こんなふうに見られて！ あああ

あん！ どうして！ どうして！ どうして！

愛美は腰をかくかくと激しく動かしながら、泣きよがった。

「ほんとのほんとにホンモノの変態さんなんだなお前。見られてどうしようもなくなってるんだろ？ こんなガキに見られて、よがり狂っちゃってるんだろ？ 親が見たら泣くぞマジで。でも可愛いぞ。お前はなかなか可愛い顔をしてるしな。ほら、ご褒美にホンモノをくれてやるから、そろそろイっていいぞ」

少年は口をぽかんと開けて、目の前の光景に見入っていた。四つんばいになって、尻にバナナを突きたて、クリトリスをつつかれ、さかんに尻を振る愛美。

「すごい。お姉ちゃん、すごい顔してるよ」

「見ないでッ！ 見ないでッ！ おねがああいッ！ 見ないでくださいッ！」

なぎさは愛美のクリトリスをいじりながらズボンとパンツを下ろした。そそりたったペニスが恐ろしいほど大きい。少年はさらに目を丸くした。

「すごい、お兄ちゃんのちんちんおつきい……」

なぎさはにつこりと少年に微笑むと、愛美の尻を指差した。

「見ててごらん。これが今からこのお姉ちゃんのお尻の穴に入るからね。このお姉ちゃん、きつと死ぬほど狂うから、面白いよ」

「いやあ！ そんな！ そんなの入りませんッ！ ああああアッ！ ひあああ！」
「黙ってる。つっても無理か」

なぎさは尻に刺さったバナナを抜いた。にゅぽつと音がして、バナナが抜かれた。てらとらとバナナが濡れて光っている。

「あひッ！」

「こら、動くなよ。今からお前の尻にホンモノをくれてやる」

なぎさは愛美の尻を抱えると、ペニスをアナルに押しつけた。そのままゆっくりと沈めこます。少年は息を呑んでそれに見入った。

「うわ……すごい、ちんちんが入って……」

バナナで押し広げられていた愛美のアヌスはめりめりと音をたてながらも、なぎさのペニスをなんとか受け入れていった。愛美、歡喜と苦痛が入り混じった声で絶叫する。

「うぎいいいいいいいいいいいいッ！」

愛美の体がびくびくと痙攣した。なぎさは構わずにペニスを沈めていった。

「しかし、尻でかいなお前」

愛美の尻が震える。顔を持ち上げて、金魚が呼吸するように、愛美は口をばくばくとさせた。口からはとめどなく涎があふれている。

「ひぎあ……、あが……、お尻……、お尻ッ！」

「尻がどうした？ ほら、お前のアヌスすごいぞ。俺のぱっくりくわえてる。ほらほらほら」

なぎさは腰を振り始めた。なぎさのペニスが出入りするたび、愛美のアヌスの壁が引っぱられ、ペニスに吸いついて盛り上がったりへこんだりした。愛美は再び絶叫し始めた。

「んんんあッ！ もう！ わたし、おかしくなっちゃいます！ おかしくなっちゃう！」

「おい変態。変態さま。どうだ俺のちんぽ。気持ちいいか？ 気持ちいいのか？ どうなんだよッ！」

尻の穴をめちやくちやに責めまくられて、愛美はがくと頭を下げると、両手で地面をかきむしった。爪で雑草や土を思いきりほじくり返す。

「ああ、わたし、こんな格好で！ こんなところで犬みたいに四つんばいにされて！ 人に見られて！ お、お尻に入れられて！ どうして！ どうして！ いやあッ！ 愛美、変態になっちゃう！ 変態になっちゃうよお！ いやあああッ！」

絶頂が近いのだろう。愛美の背中が痙攣を始めていた。

「愛美、お前はとっくに変態なんだよ。昔から、変態だったんだよ。自分で気づいてなかっただけだよ。自分で自分の半分に気づいていなかったんだ」

自分の半分に気づいていなかったんだ。

なぎさは愛美にそう呟きながら、思った。

自分もそうだったんじゃないかと、思い始めた。俺は自分のことを、気の弱い、ただの弱虫ぐらいにしか思っていないかったけど、ほんとうは……。

「お尻がいっぱい！ お尻がいっぱいだよお！ お尻が、固くて大きいのでいっぱいなおッ！」

愛美は泣き喚きながら、尻を振ってよがりつづけている。

「いやあああッ！ わたし狂っちゃう！ とうにかなっちゃうよおッ！」

……ほんとうは、こんなふうには、人を意のままに操る能力がきちんと備わっていたんだ。美奈都と俺は双子なんだ。美奈都にできて俺にできないわけがない。

俺は俺の半分に気づいていなかったんだ。

俺は今まで、美奈都の陰に隠れて、随分とひどい思いをしてきた。なにをやってもあいつには勝てないと思っていた……。

「お尻ッ！ お尻ッ！ お尻いいいいいいッ！」

それは違う。俺だって、俺だってできるんだ。

なぎさの体をアドレナリンが駆け巡った。なんでもできそうな、そんな気がした。

「ほおらたっぷりちんちんやるぜえ！ いけ！ イッチまえ！」

なぎさは激しく愛美の尻にペニスを突き入れた。愛美は目をうつすらと開いて、高々と尻を上げた。

「ああ！ 愛美もうだめえッ！ ごめんなさいッ！ わたし変態に！ わたし変態になっちゃいます！ いやああああん！ もう駄目！ もう駄目ッ！」

……俺は、今、この同級生を征服している。俺の意のままに愛美は尻を振っている。なぎさは人を征服する快感に身を震わせた。

なんて気持ちがいいんだろう。

ちくしよう。俺は、今、自分の半分に気づいた。俺は今、自分の半分に気づいた。

「気持ちいいか？ おい、変態さま！」

なぎさは怒鳴った。怒鳴って、腰を痛いぐらいに愛美の尻に打ちつけた。ぱあんぱあんと乾いた音が公園に響く。

「いく、いっちゃうの！ こんなとこでいっちゃうの！ 人に見られてイッチャうのお！ こんなところでお尻にちんちん突っこまれて変態の愛美はイッチャいますッ！」



「うそだろお！」

その名前を見ると、ざわめきが一段と激しくなった。

佐倉なぎさ、六百点と、マジックで書き足された名前が誇らしげに光っていた。

「なぎさが、わたしを？」

わたしを負かした、その事実には美奈都は打ちのめされ、呆けたように立ちすくんだ。フラッシュバックで思考が途切れる。美奈都は暗黒の記憶の闇に引きずりこまれる。

そして美奈都は鼻の奥に、つんと血の匂いを嗅いだ。

※

「ここがいいな」

なぎさは言った。美奈都と沙希を連れて、なぎさは公園までやってきた。沙希はすでにがたがた震えている。すべり台のついた砂場に立って、なぎさは腕を組んだ。

「じゃあ約束だからな。沙希ちゃん、服を脱ぎな。美奈都、文句ねえだろ？」

「……うん」

美奈都は素直に頷いた。なんだか人形のように精気がない。なぎさは沙希に近づくと、おもむろに髪の毛を引っつかんだ。

「ひ！ いや……」

沙希の清楚な顔が、髪の毛を引っばられる苦痛にゆがんだ。なぎさは無造作に沙希の制服のブラウスの襟に手をかけ、下に引きちぎった。ボタンが飛んで沙希のブラジャーに包まれた胸がぷるんと現れた。細い体つきの割には、結構大きい。

「揉んでやるよ」

乱暴にその胸をもみしだいた。沙希の顔が苦痛にゆがむ。

「い、いや、美奈都……」

「いつか、お前をこうしてやりたかったんだよ」

なぎさは左のブラのカップを持ち上げると、口を大きく開けて乳房に吸いついた。

「うま、うまいおっぱいだな……」

そして吸いつく口を乳首に移動させた。沙希のピンクの乳首がなぎさの愛撫に反応してしまい、むくむくと大きくなっていく。

「なんだ、感じてんのか。恋人の前だつてのに、随分いやらしい体をしてるな」

「いや、美奈都、助けて……」

それでも美奈都は反応しない。呆けたように突っ立っているだけだ。

「あはは、どっちも乳首たってんじゃねーか！」

ぐりぐりと、両の乳首をつねりあげた。沙希の顔が苦痛にゆがむ。

「いたい、いたあい、やめて、お願い……」

「やめるか馬鹿野郎」

今度は沙希の乳首を口に含み、触るか触らないかぐらいのところまで舌を使い、微妙に舐めあげていった。

「や、やめて……、あ……」

沙希は頭をのけぞらし、砂場に膝をついてしまった。

なぎさは制服のジッパを下ろすと、例によつてずるりとペニスを引き出した。伝家の宝刀を見せつけるかのように、それを沙希の胸になすりつける。沙希の滑らかな白い胸が、なぎさの分泌した液によつて汚されていく。

「じゃあ、パイずりでもしてもらおうか」

沙希の首根っこをつかみ、ぐいと、頭を押しこんだ。

「……パ、パイずり？」

「ああ、お前のこのおっぱいで、俺のちんぽをしごくんだよ。やり方ぐらい知ってるだろう？」
なぎさはそう言うと、沙希の目を覗きこんだ。

沙希は戸惑った。美奈都に見られているような、そんな気がしてならなくなる。いくら双子で顔が似ているとはいえ、今までそんなふうに感じたことはなかったのだ。それが今、

こうしてその目を見ていると、体が震え、決して逆らえないような、そんな気持ちになつてくるのだ。

「は、はい……」

沙希はゆつくりと、怒張したなぎさのモノをつかんだ。大きい。この前見たときはなんとも思わなかったのに、今見ると、胸がときめいてくる。これを自分の体に受け入れたい、そんな気分になつてくる。今まで男性に興味を抱いたことなどなかったのに。

「……こ、こうですか？」

沙希は両手で乳房を持ち上げ、なぎさのちんぽを自分の胸の間に挟んだ。

「それで、俺のをこするんだ。丁寧にな」

沙希は乳房をつかんだ両手を動かして、なぎさのちんぽをこすつた。

ものにもと沙希の乳房が自在に形を変え、なぎさのちんぽに刺激を送りこんでいく。沙希は一生懸命になぎさのちんぽを自分の胸で揉みあげた。

「だめだな。全然気持ちよくねえ。お前は下手糞だな」

なぎさはペニスをつかんで、沙希の口元へ持っていった。

「口でやれ。くわえろ沙希。しゃぶれよ。その綺麗な口で含んでくださいよ。美奈都のあそこを舐め舐めたお口で含んでくださいって、言ってるんだよ」

初めて嗅ぐ男の匂いに沙希はむせた。目をつむって、沙希は舌を突き出し、なぎさの先端にそっとそれをつけた。

「ん、んん……」

ちろちろと遠慮がちになぎさのモノに舌を這わせていると、なぎさのピンタが飛んでくる。バシッと音がして、沙希の顔がゆがむ。

「いたッ！」

なぎさは沙希の顎をぐいとつかむと、その目を覗きこんだ。

「なあおい、ちゃんとやれ」

その目の色に沙希は驚いた。体の中心に電流が走ったようだ。さつき、感じたものは間違いではなかった。体の奥がじゅんと震え、腰の力が抜ける。熱いものが沙希の体を下りていき、沙希のパンティに染みを作った。

「み、美奈都……、美奈都の目……」

沙希はさつきとは打って変わった調子で、なぎさのペニスをしゃぶると、猛烈に舌を使い始めた。自分でもわけがわからなくなっている。じゅぽっじゅっぽっとな派手な音をたて、ペニスがぐっぐっくと沙希の喉の奥に詰められていく。

「大きい……、なぎさくんの、大きい……」



「レズビアンでもきちんとフェラできるんだな。うまいじゃねえか」

「はあむ、むは……、おいしい、これおいしい……」

沙希は口中を唾液であふれさせ、夢中になってなぎさのペニスに吸いついた。股間から愛液があふれて止まらない。自分は狂ってしまった、と思った。なぎさの目を見た瞬間、狂ってしまった。

「ちんちん、ちんちんこんな味するの……、んぐ……、むせひややう……、わたひのおくひんなは、いっぷふあい……」

じゅぐつぽ、じゅぐつぽと公園の砂場に、沙希の口腔となぎさのペニスが奏でる音楽が、あふれ、夕闇訪れる公園を淫靡な音で満たしていく。

なぎさはいきなり沙希の左足を抱えると、持ち上げてすべり台に横たえた。

「あっ……」

「じゃあ、チンポ入れるわ。沙希ちゃんのおま○こにちんぽ入れるから、足広げろ」

なぎさの乱暴なセリフに感じてしまっただうしようもない。沙希は飢えたメス犬のように、夢中になって自分でパンティを脱ぎ捨てた。粘度の高い蜜が、にんまりと糸を引いて、透けるレースの下着と、沙希の女の中心をつないでいる。

「入れて……、入れて……、はやくう……」

なぎさは沙希の右足を抱えて、沙希の濡れまくった陰唇の間に、ペニスをあてがった。巨大なペニスが自分の女の部分にあてられるところを、沙希は夢中で見つめていた。

「ねえ、なぎさくん、それ、入っちゃうの？ 沙希の中に入っちゃうの？」

「ああ、今からずっぽり沈めてやる。欲しいのか沙希？」

「欲しい、なぎさくんのちんちん早く入れて欲しい……、お願い、お願いしますう……」
沙希は自ら腰を動かして、なぎさのモノをくわえ込もうとする。

なぎさが焦らすように沙希の蜜であふれた入り口をペニスでかきまわすと、沙希は半泣きでおねだりを始めた。

「早く入れて……、じゃないと、じゃないと沙希しんじやう……、もう、早く入れて欲しいのお……」

「美奈都の仕込みはすげえな。あんな清楚な沙希がこんなになるとはね」

ぐいと腰を動かして、正常位でなぎさは沙希の中にゆつくりと沈めていった。沙希は処女とはいえ、美奈都の指を何本もくわえこんでいたためか、軽々となぎさのモノを受け入れていった。沙希の蜜は顔に似合わず濃密で粘度が高く、なぎさのモノにいやらしく絡みついて刺激する。

「んかはっ！ ちんちん、ちんちん入ってるッ！ 沙希んなかに入ってるッ！」

そのままなぎさは腰を使い始めた。沙希はそのお嬢様風な髪の毛を振り乱し、よがり狂った。いつものおとなしい沙希は、その姿からはまったく想像できない。

「ああああああッ！ あひ！ すごおい！ なぎさ……、なぎさああッ！」
ぐっちゅ！ ぐっちゅ！ にぎっちゅ！

沙希のおま〇こが淫靡な音をたててなぎさのちんぽを食らいこんでいく。

沙希は自ら腰を振りたてて、快楽の中に沈んでいった。隣で恋人の美奈都がじっと見つめているのももうわからないだろう。間抜けに開いた口からは涎を垂らし、だらしなくよがり狂った。

「ほらほら。隣で美奈都が見てるぞ？ ほら、もっと狂っちまえ！」

ぶびっ！ ぶびいっ！ ぶびっ！

なぎさのペニスが派手な音を撒き散らし、沙希の膣をぐちゃぐちゃにかきまわす。うつろな目をした沙希は、もうなにも考えられないようだ。ただひたすら腰を突き上げ、すべての快楽をむさぼるように、激しくあえいだ。

「もっと……、もっとちんぽちようだい……、ひあ、あ！ ああああ！」

「なあ、お前ってば、あれだけ俺のこと馬鹿にしたのに、嫌ってたのに、その俺のちんぽでよがるのか？ こんなにしやがってよッ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元的な設定は、美満の方に入ってます。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!



二次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



三日月ファンファン

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!



ニャックプリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!



メガミクライシス

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



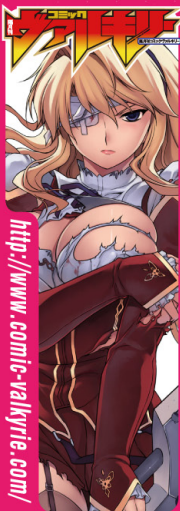
電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!